

研究成果
報告

歴史叙述と文学



人間文化研究機構 国文学研究資料館
共同研究 歴史叙述と文学 編

研究成果報告

歴史叙述と文学

共同研究

歴史叙述と文学

編

共同研究 歴史叙述と文学 報告書

目次

緒言

福田 景道

3

研究概要

5

後朱雀天皇とキサキの文学的営為・文化圏についての一考察―女御延子を中心に―

高橋 由記

9

斎王経験者の密通をめぐる歴史叙述と物語引用―『今鏡』を中心に―

本橋 裕美

19

伝記への執心―『扶桑略記』の歴史叙述、一隅―

大橋 直義

27

『平家物語』における多田行綱―「裏切り者」と言われた男の素顔―

清水 由美子

41

『増鏡』と『梅松論』の歴史性と文芸性―「横さま」と「横シマ」の皇位継承をめぐって―

福田 景道

51

松田秀任と加賀―『武者物語』・『武者物語之抄』の記述をめぐって―

森 暁子

65

徳富蘇峰『人物管見』論―人物評論と同時代の文学論―

吉岡 亮

77

緒言

歴史叙述と文学作品には密接な関連性が認められることが多い。文学、特に散文文学は歴史から離れては存立し得ないとも言える。ほとんどすべての文学的題材は歴史と無関係ではなく、歴史と無縁に享受される作品は例外的にしか存在しないであろう。また、歴史叙述が一つの物語として文学に結びつくという認識が定着しつつあると言われている。このような状況を踏まえて、文学と歴史の関係を新たな視点から把握し直すことを要請されて、多様な時代の、多様な文芸的歴史叙述、多様な歴史文学作品を扱う研究者の参加を得て成り立ったのが本研究である。

三年間の共同研究で、対象となった作品の成立年代は古代から近代の長期間に及び、ジャンルも歴史物語、歴史書、軍記文学、軍書、伝記文学などに広がる。しかし、すべての研究が、歴史叙述と文学との関連について、新しい視界によって新しい眺望を提供する点で共通し、一貫性をもつ。多方面に広がる分散的な研究成果が「歴史叙述と文学」という共通項のもとに集結したところに本研究の第一の意義が認められる。

研究活動は、六回の研究会での二十一発表題目と本成果報告書の七編の研究論文に集約されるが、全国各地での資料調査も着実に遂行され、学術雑誌や紀要への論文投稿、各種学会での口頭発表に発展した。

その中で、主な研究対象になった作品としては、『栄花物語』『大鏡』『今鏡』『水鏡』『増鏡』『梅松論』『扶桑略記』『保元物語』『平家物語』『愚管抄』『兵法問答』『武者物語』・『武者物語之抄』『十二文豪』『人物管見』などが挙げられる。関連して取り上げられた作品は数知れない。無作為に列举すると、『将門記』『平治物語』『甲陽軍艦』などの軍記・軍書、『秋津島物語』『唐鏡』『保曆間記』『池の藻屑』『月のゆくへ』など歴史物語、『伊勢物語』『源氏物語』などの物語文学、『古今集』『後拾遺集』『金葉集』『新古今集』『新勅撰集』『続後撰集』『続古今集』『新千載集』『定頼集』『経信集』『大式三位集』『散木奇歌集』『元元集』などの和歌文学、『日本霊異記』『三宝絵』『今昔物語集』『十訓抄』などの説話文学、『続日本紀』『日本三代実録』『東大寺要録』『七大寺巡礼私記』『南都巡礼記』『東大寺縁起絵詞』『藤原保則伝』『吾妻鏡』『帝王編年記』『一代要記』『百鍊抄』『本朝皇胤紹運録』『寛永諸家系図伝』『拾遺往生伝』『本朝神仙伝』などの諸記録・史書・伝記と多種多様である。それに加えて、軍学者北条氏長、同氏英、松田秀任らも注目され、福澤諭吉、田口卯吉、山路愛山、北村透谷、高山樗牛、坪内逍遙、竹越与三郎、塚越芳太郎、内田魯庵による近代の著作も取り扱われた。

これらを時系列にしたがって配列すると、日本の歴史文学や文芸的歴史叙述の流れを相当な程度に描き出すことができるであろう。このような広汎性と網羅性を本研究の第二の意義と見なしでも大過ないと思われる。

本報告書所載の七論考の内容については、各編冒頭の要旨に譲り、以下に、「歴史叙述と文学」研究に関する可能性の一端を、掲載順に指摘しておく。

第一・第二論文は、ともに後朱雀帝関係者に注目する。『栄花物語』を中心に王朝時代の勅撰集・私家集を博搜して後朱雀帝女御延子の「文化圏」の存在感を証明する第一論文は、撰関時代盛時と院政期の間に埋没しかねない後朱雀朝が文化史上で注目に値することを再確認するものでもある。『今鏡』において齋王経験者の「婚姻」が『栄花物語』や『伊勢物語』の受容によって「密通」に変換される実相を明らかにする第二論文は、歴史叙述の文芸的形成の経緯を後朱雀帝皇女の描出方法に基づいて別決する。この二論考は、「歴史叙述」と「文学」の関係に注目することで、後朱雀帝時代が再評価される必然性を示すものである。

第三論文では、『扶桑略記』伝本の本文残存の実状が明らかにされて、厳密な本文批判への道筋が示される点だけでも意義深い。それだけでなく、特定人物の伝記における偏向性と相互関与性、対外交渉史記述と関係が見いだされることが、歴史叙述としての『扶桑略記』全体像解明の端緒となり得ると評価できる。

第四論文は、鹿ヶ谷の密議と一の谷合戦で重要な役割を果たす多田行綱の『平家物語』における文学的人物造型が、後白河院や近衛家との密接な関係などの歴史的事情に基づくことを究明するものである。その中で、歴史研究の進展が文学研究をも進展させることが例示されるところがあり、「歴史叙述」と「文学」の多層的関係が確認できる。

第五論文は、『増鏡』と『梅松論』の皇位継承記事に類似表現「横さま（横シマ）」を見だし、文芸的歴史叙述としての特色に迫ろうとするものだが、両書が「歴史を内包する物語」という性格を共有する点を指摘して、歴史叙述と文学の関係の解明に繋がるどころがある。

第六・第七論文には、論証の過程の中に、歴史叙述と文学について考察する上で参考すべき点が多く含まれる。武辺咄集『武者物語』や『武者物語之抄』の精緻な読解によって松田秀任の兵学者としての実像を解き明かす第六論文は、その論旨そのものが十分に斬新で意義深いと言えるが、論述の過程で用いられる素材の中に、歴史が物語られ叙述される様相が数多く認められる。第七論文は、徳富蘇峰の『人物管見』について、新しさ、人物論をめぐる言説、山路愛山の文学史への援用などの諸相を明示し、その上で、民友社による史論や人物評論と文学・小説との区分を導き出して、歴史叙述と文学とを多角的に対比するに至る。

以上のように、本報告書の論説と本共同研究には、「歴史叙述と文学」に関する研究の今後の可能性と針路を指し示すものが含まれている。それによって学界に貢献できれば幸いである。

平成二十八年六月三十日

研究代表者 福田 景道

研究概要

□研究テーマ

歴史叙述と文学

□研究期間

平成二十五年度～平成二十七年度（三年間）

□研究目的

古来より、日本の文学は歴史叙述との相互連関の中で自らの位置を測定し、ときにそれらとの緊張関係において自らを文学言説として形成してきた。こうした歴史叙述との連関をめぐっては、これまで、個々の作品に即して、多くの研究者により多様な見解が提出され、幾多のすぐれた知見が蓄積されてきている。

本研究は、個々の専門領域で行われてきた個別的研究が相互に交流する場を作り出し、そこから、歴史叙述と文学との関連について、より見通しのきく広い視野を展望することを目指す。

□研究組織（所属は平成二十七年度による）

大橋 直義 和歌山大学・教育学部・准教授

清水 由美子 清泉女子大学・非常勤講師

高橋 由記 流通経済大学・経済学部・准教授

福田 景道 島根大学・教育学部・教授
（研究代表者）

森 暁子 お茶の水女子大学・グローバルリーダーシップ研究所・特別研究員

吉岡 亮 札幌大谷大学・社会学部・准教授

本橋 裕美 日本学術振興会・特別研究員（平成二十六年三月までの研究分担者）

アドバイザー

谷川 恵一 国文学研究資料館・教授・副館長

落合 博志 国文学研究資料館・教授

□ 個別研究課題

- ・平安後・末期の後宮とその文化圏に関する研究（高橋由記）
- ・歴史物語（文芸的歴史叙述）における歴史性と文学性の相関に関する研究（福田景道）
- ・民友社の歴史叙述の研究（吉岡 亮）
- ・近世軍書における戦国の歴史叙述の研究（森 暁子）
- ・歴史物語における皇女に関わる物語引用の研究（本橋裕美）
- ・私撰国史の文献学的研究（大橋直義）
- ・軍記文学における後白河院政期の歴史叙述についての研究（清水由美子）

□ 研究活動

◎ 研究打合せ会

- ・平成二十五年五月十九日（日）国文学研究資料館第1会議室
研究代表者を互選により選出（島根大学・福田景道）

◎ 平成二十五年度第1回研究発表会

- ・平成二十五年八月二十七日（火）国文学研究資料館第2会議室
- 1 福田景道 「文芸的歴史叙述の二面的享受と変容―『梅松論』諸本にみられる文芸性と歴史性―」
- 2 大橋直義 「『扶桑略記』研究の可能性」
- 3 森 暁子 「北条氏長の軍書における戦国の歴史叙述―『兵法問答』の場合―」
- 4 研究の打合せ

◎ 平成二十五年度第2回研究発表会

- ・平成二十六年三月十七日（月）国文学研究資料館第2会議室
- 1 本橋裕美 「『大鏡』『栄花物語』における皇女に関わる物語引用の検討―『栄花物語』三条天皇皇女に関する文脈を中心に―」
- 2 高橋由記 「後朱雀朝の女性の文化圏について―歴史物語と和歌と―」
- 3 清水由美子 「平家物語の歴史認識―末法の描かれ方をめぐって」
- 4 吉岡 亮 「明治二〇年代の歴史と文学―民友社の歴史叙述の研究（1）―」
- 5 研究の打合せ

◎平成二十六年年度第1回研究発表会（通算第3回）

・平成二十六年八月十九日（火）国文学研究資料館第2会議室

- 1 福田景道「歴史物語の歴史語り―粹物語構想にみられる歴史性と文芸性―」
- 2 大橋直義『扶桑略記』『水鏡』における僧伝・縁起説についての二、三」
- 3 森 暁子「北条安房守家の歴史叙述」
- 4 研究の打合せ

◎平成二十六年年度第2回研究発表会（通算第4回）

・平成二十七年三月十八日（水）国文学研究資料館第2会議室

- 1 吉岡 亮「明治二〇年代の歴史と文学―民友社の歴史叙述の研究（2）―」
- 2 清水由美子『平家物語』の歴史叙述―多田行綱の造型をめぐる―」
- 3 本橋裕美『水鏡』井上内親王に関する記述について」
- 4 高橋由記「後朱雀天皇のキサキとその周辺の文学的営為」
- 5 研究の打合せ

◎平成二十七年年度第1回研究発表会（通算第5回）

・平成二十六年八月十八日（火）国文学研究資料館第2会議室

- 1 福田景道『増鏡』の歴史叙述と文芸性―「横さま」の皇位継承―」
- 2 大橋直義『扶桑略記』巻二十（陽成天皇紀）について」
- 3 森 暁子「松田秀任の来歴と歴史叙述―『武者物語』と金沢藩との関わりを中心に―」
- 4 研究の打合せ

◎平成二十七年年度第2回研究発表会（通算第6回）

・平成二十八年三月二十八日（月）国文学研究資料館第2会議室

- 1 高橋由記「後朱雀天皇女御延子について―実父頼宗と養母脩子内親王から受け継いだもの―」
- 2 本橋裕美『今鏡』と虚構文学の関わり」
- 3 清水由美子「中世軍記文学にとつての「中比」―四類本『保元物語』の時代認識を起点として―」
- 4 吉岡 亮「明治二〇年代の歴史と文学―民友社の歴史叙述の研究（3）―」
- 5 研究の打合せ

□資料調査先

平成二十五年

国立国会図書館、国文学研究資料館、武田薬品工業株式会社京都薬用植物園、岡山市周辺、鶴越(神戸市兵庫区)周辺、須磨周辺、城南宮(京都市伏見区)周辺、法住寺(京都市東山区)周辺、他

平成二十六年

国立国会図書館、金沢市立玉川図書館近世史料館、東北大学狩野文庫、神宮文庫、飛騨高山まちの博物館、他

平成二十七年

東京大学付属図書館、金沢市立玉川図書館近世史料館、阿波国文庫(徳島市文化の森総合公園内)、金比羅神宮、白峯寺、善通寺、他

□研究成果

論文

清水由美子「資料としての軍記文学、物語としての軍記文学」(『國學院雑誌』第一一四卷第十一号、平成二十五年十一月)

森 暁子「北条氏長『兵法問答』の合戦語り」(『近世文藝』第一〇〇号、平成二十六年七月)

吉岡 亮「内田魯庵『文学一斑』におけるヘーゲル——その典拠とドラマ論」(『札幌大谷大学 社会学部論集』第三号、平成二十七年三月)

清水由美子「歴史物語の語り手をめぐる一考察——女が歴史を語る時代——」(中央大学文学部『紀要 言語・文学・文化』第一一五号、平成二十七年三月)

高橋 由記「『栄花物語』における藤原生子——描写の意義に関連して——」(『大妻国文』第四十六号、平成二十七年三月)

福田 景道「『池の藻屑』の皇位継承史構図——編年史的側面と「世継」——」(『島大国文』第三十五号、平成二十七年三月)

大橋 直義「『扶桑略記』陽成天皇紀の方法——不戦の軍記——と漢文伝記と——」(『文学』第十六卷第二号、平成二十七年三月)

福田 景道「歴史物語における不即位東宮——先坊(前坊)——再考——」(『島根大学教育学部紀要』第四十九卷、平成二十七年十二月)

清水由美子「四類本『保元物語』の時代認識——冒頭のことば「中比」をめぐって——」(『成城国文学』第三十二号、平成二十八年三月)

口頭発表

森 暁子「北条氏長『兵法問答』における武田方の合戦記事について」(平成二十五年七月二十六日、仮名草子研究会、国文学研究資料館)

大橋 直義「仏法公伝説の再検討(『南都巡礼記』元興寺条にむけて)」(平成二十五年十一月二十三日、巡礼記研究会、慶應義塾大学)

大橋 直義「『扶桑略記』の歴史叙述」(平成二十六年十一月三十日、軍記・語り物研究会第四〇三回例会、法政大学)

森 暁子「松田秀任のルーツと金沢」(平成二十七年十一月二十日、仮名草子研究会、国文学研究資料館)

研究成果報告 歴史叙述と文学

平成二十九年（二〇一七）三月十六日印刷
平成二十九年（二〇一七）三月二十四日発行

編集 共同研究「歴史叙述と文学」

研究代表者 福田 景道

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

〒一九〇—〇〇一四

東京都立川市緑町一〇—三

印刷 有限会社太平印刷



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館